

東南アジア史学会会報 No.10

昭和 44 年 8 月 31 日

東南アジア史学会第 6 回研究大会報告

第 6 回研究大会は 7 月 5、6 日、東京の学士会館本郷分館において開催され、そのプログラムは次の通りであった。

第一日

開会（午後 1 時）

研究発表（午後 1 時 10 分～午後 4 時）

「ホッヘンドルブ『バタビヤ領土の現状に関する批判』について」 田淵保雄氏

「螢の研究史」 小川博氏

「タイ国サンガの構造」 石井米雄氏

会員総会（午後 4 時半～午後 5 時半）

懇親会（午後 6 時～午後 8 時）

第二日

シンポジウム「華僑」（午前 9 時～午前 12 時 午後 1 時～午後 4 時）

報告者

「ヴェトナム諸王朝の華僑政策」 藤原利一郎氏

「マラヤ北西部の中国人集落について」 前田清茂氏

「華僑社会の発展と変質」 河部利夫氏

コメンテーター 和田久徳氏

長井信一氏

白鳥芳郎氏

閉会

研究発表とシンポジウムの報告の要旨は次の通りであった。

ホッヘンドルプ「バタビヤ領土の 現状に関する簡単な批判」の概略

田淵保雄

重商主義的資本の段階から産業資本の段階に移行する時点において、従来の東印度会社的經營を否定し、国家による東印度の直接支配と自由貿易政策を採用することを提案した最初のオランダ植民史上の人物が、ディルク・ファン・ホッヘンドルプ（1761-1822）である。彼の最大の功績は、東印度会社は内在的自己矛盾により最早救済されえないこと、会社は不可避免的に崩壊しなければならないことを本国の為政者と市民に明らかにした点にある。会社は商業機関としての機能と政治機関としての機能を同時に内包している点に本質的な矛盾があることを彼は主張した。

1792年10月、ジャワ北海岸中央にあるジャバラの駐在官として赴任した時、始めて表題の論考を手紙の形式で本国の高官達に送った。後の「96年のメモ」、「99年の報告」と比較するとこの「批判」は必ずしも彼の全改革プランを明確にはしていないが、始めて会社の存在そのものを否定した点において特筆されるべき文献である。

彼の思想は二本の柱からなる。

1. 国家による直接統治 これは会社の否定を意味すると同時に会社が従来依存してきたジャワの封建制の否定をも意味する。またジャワ農民を封建制から解放し、これを直接オランダ共和国の「臣下」とみなし、これと直結した政治体制を作ることを目標としている。以上のことを実現する手段として次の諸点が述べられている。
①一般農民の土地私有制を認め、その上に立った地租制度を確立し租税徵収権を国家が掌握する。このことはジャワ農民を商品生産的近代農民に転化させる狙いを含んでいる。地租制度についての彼の提案は英國のベンガル經營を直接見聞したことを模範にしてなされたものである。
②軍制の改革。土侯との間の「契約」によって、会社は土侯が送る援助兵に兵員の源泉を求めてきた。彼はこの制度を廃して、給料をうけとる「自由ジャワ兵」でもって軍隊を作ることを主張した。彼の戦略思想は英國の脅威から東印度領土を護ること、内部の敵である土侯と闘うことを骨子としている。
③法制の整備。オランダ・ローマ法とコーラン法との間に一致点を見出し、それによって現地人をオランダ市民として取扱い、同時にジャワをオランダ共和国を形成する一構成要素とみなそうと彼は提案している。
④政治形態。本国に国会議員よりなる印度委員会を設け、これに印度經營の全権をもたせる。会社の首脳である「17人委員会」を廃止する。

2. 自由貿易 彼が「國富論」を読んだかどうかはわからない。その所論は國富論の精神と同じものであるとみるべきであろう。ベンガルにおける英私貿易商人の活躍、アメリカ人の来島と彼ら

の旺盛な自由貿易への意欲に接したことが、彼の自由貿易論の背景をなしている。1783年、ケープ滞在中に彼はケープ自由農民が貿易の自由を求めて会社と闘っている有様をみたことも重要な要素となっている。自由貿易を推進するために次の諸点が提案されている。④輸出入税を払えばすべての個人商人に貿易の自由があたえられるべきこと。⑤土地私有農民が農作を自由に処理できるよう措置する。⑥バタビヤとケープを自由港にする。⑦商館を廃止して領事をおく。⑧海上保険制度と信用制度を整備。⑨政府の仕事は自ら商業に従事することではなく、農業・マヌファクチャーリーを保護し、その上にたつ商業活動を奨励することである。

以上がホッヘンドルフの基本的な政策である。しかし、本国においては必ずしも彼の意見は受け入れられなかった。

蟹の研究史

小川博

中国の南部沿岸に舟に住居する蟹と呼ばれる人々がいる。中国の文献では三国兩晋時代から記録されているが、宋以前においては水上居住民であったかどうかはわからない。宋以後の記録は水上生活がうかがわれる。蟹の研究は文献学的には桑田六郎、何格思、羅香林、呂振羽、徐松石、饒宗頤、社会学的には陳序經、可児弘明、民族学的にはW・エーバーハルト、H・J・ウェインズ、羽原又吉、白鳥芳郎、言語学的には松本信広の各氏によつていくつかの論考が提出されている。

蟹について想定される共通性は舟上居住あるいは水上居民ということであるが、西日本沿海やマレイ半島方面の舟上居住の人々の生活状況をみても、彼らは所在する地域に深くかゝわりあっており、陸地との交渉の深いことがうかがわれる。即ち食料、燃料としては植物性のものが、飲料水の補給には陸地に依存しなければならない。彼らの住居としての舟もその建造や修理は水上では困難であり、舟材も陸地より供給されなければならない。そして舟の形状も操舟の方法も、それぞれ各地の近接した陸地の造船、操舟の習俗に深くつながっているといつてよい。また蟹の水上生活も、広州、香港、福州、泉州あるいはトンキン湾沿岸であり、とかく都市にむすびつき、運輸、漁撈に従事している。とくに漁獲物は交換の形式で生活資材を入手したのであろう。しかし文献記録はこれらについてはまったく空白である。真珠採取の方法としての潜水漁撈と蟹の関連もよくわからない。真珠採取者が、舟に住居していたとはかぎらない。むしろ蟹は農業を主体制としていた中国社会においてはその非農業者としての異質性が、歴史的に長い異和感を与えたのかもしれない。（参

の旺盛な自由貿易への意欲に接したことが、彼の自由貿易論の背景をなしている。1783年、ケープ滞在中に彼はケープ自由農民が貿易の自由を求めて会社と闘っている有様をみたことも重要な要素となっている。自由貿易を推進するために次の諸点が提案されている。④輸出入税を払えばすべての個人商人に貿易の自由があたえられるべきこと。⑤土地私有農民が農作を自由に処理できるよう措置する。⑥バタビヤとケープを自由港にする。⑦商館を廃止して領事をおく。⑧海上保険制度と信用制度を整備。⑨政府の仕事は自ら商業に従事することではなく、農業・マヌファクチャーリーを保護し、その上にたつ商業活動を奨励することである。

以上がホッヘンドルフの基本的な政策である。しかし、本国においては必ずしも彼の意見は受け入れられなかった。

蟹の研究史

小川博

中国の南部沿岸に舟に住居する蟹と呼ばれる人々がいる。中国の文献では三国兩晋時代から記録されているが、宋以前においては水上居住民であったかどうかはわからない。宋以後の記録は水上生活がうかがわれる。蟹の研究は文献学的には桑田六郎、何格思、羅香林、呂振羽、徐松石、饒宗頤、社会学的には陳序經、可児弘明、民族学的にはW・エーバーハルト、H・J・ウェインズ、羽原又吉、白鳥芳郎、言語学的には松本信広の各氏によつていくつかの論考が提出されている。

蟹について想定される共通性は舟上居住あるいは水上居民ということであるが、西日本沿海やマレイ半島方面の舟上居住の人々の生活状況をみても、彼らは所在する地域に深くかゝわりあっており、陸地との交渉の深いことがうかがわれる。即ち食料、燃料としては植物性のものが、飲料水の補給には陸地に依存しなければならない。彼らの住居としての舟もその建造や修理は水上では困難であり、舟材も陸地より供給されなければならない。そして舟の形状も操舟の方法も、それぞれ各地の近接した陸地の造船、操舟の習俗に深くつながっているといつてよい。また蟹の水上生活も、広州、香港、福州、泉州あるいはトンキン湾沿岸であり、とかく都市にむすびつき、運輸、漁撈に従事している。とくに漁獲物は交換の形式で生活資材を入手したのであろう。しかし文献記録はこれらについてはまったく空白である。真珠採取の方法としての潜水漁撈と蟹の関連もよくわからない。真珠採取者が、舟に住居していたとはかぎらない。むしろ蟹は農業を主体制としていた中国社会においてはその非農業者としての異質性が、歴史的に長い異和感を与えたのかもしれない。（参

照 小川博 中国史上の蟹——蟹についての諸学説の沿革について（一、二）—— 海事史研究
十二、十三、日本海事史学会 昭44.3，昭44.10）

タイ国サンガの構造

石井米雄

タイ国の仏教サンガ (Khana Song Thai) は、出家者の修道の場として組織された。自律的機能集団であって、出家者中心主義の上座部仏教においては、仏教的価値の具現者として、一義的重要性をもつ。

サンガの構成員であるビクは、生産活動に従事することを許されていないので、サンガは、必然的に、その存在を、サンガ外の支持者に依存せざるを得ない。このことは、サンガの自律性のたてまえの、不安定化要因として働く。

タイ国の為政者は、国民統合のシンボルとしての仏教（具体的にはサンガ）の価値に着目し、一貫したサンガ保護政策をとり続けてきたが、その内容をみると、一方において、サンガの超俗性を護持し、確認する、という姿勢をとりつつも（例：破戒僧の還俗強制によるサンガの浄化——ラーマ一世王），他方、サンガに対する国家統制、干渉が、次第に強められる傾向にあることが注目される。

ラタナコーシン期（1782～）には、国家とサンガとの関係について、つきのような時代区分を設定することができよう。

第1期 (1782～1902)

(1) 前期 (1782～1851)

モンクット親王によって、復古主義的宗教改革運動が起された結果、王族を強い支持層とするタマユット派が生れた。

(2) 後期 (1851～1902)

サンガの行政機構における王族の発言権が、次第に強められた。

第2期 (1902～1941)

地方行政組織が整備され、タイ国が近代的中央集権国家として発展するにともない、サンガにも法的地位が与えられ、同時に、国家的統制の合理的機構がととのえられた。（ラタナコーシン歴121年（1902）サンガ統治法の公布）。

第3期 (1941～1962)

照 小川博 中国史上の蟹——蟹についての諸学説の沿革について（一、二）—— 海事史研究
十二、十三、日本海事史学会 昭44.3，昭44.10）

タイ国サンガの構造

石井米雄

タイ国の仏教サンガ (Khana Song Thai) は、出家者の修道の場として組織された。自律的機能集団であって、出家者中心主義の上座部仏教においては、仏教的価値の具現者として、一義的重要性をもつ。

サンガの構成員であるビクは、生産活動に従事することを許されていないので、サンガは、必然的に、その存在を、サンガ外の支持者に依存せざるを得ない。このことは、サンガの自律性のたてまえの、不安定化要因として働く。

タイ国の為政者は、国民統合のシンボルとしての仏教（具体的にはサンガ）の価値に着目し、一貫したサンガ保護政策をとり続けてきたが、その内容をみると、一方において、サンガの超俗性を護持し、確認する、という姿勢をとりつつも（例：破戒僧の還俗強制によるサンガの浄化——ラーマ一世王），他方、サンガに対する国家統制、干渉が、次第に強められる傾向にあることが注目される。

ラタナコーシン期（1782～）には、国家とサンガとの関係について、つきのような時代区分を設定することができよう。

第1期 (1782～1902)

(1) 前期 (1782～1851)

モンクット親王によって、復古主義的宗教改革運動が起された結果、王族を強い支持層とするタマユット派が生れた。

(2) 後期 (1851～1902)

サンガの行政機構における王族の発言権が、次第に強められた。

第2期 (1902～1941)

地方行政組織が整備され、タイ国が近代的中央集権国家として発展するにともない、サンガにも法的地位が与えられ、同時に、国家的統制の合理的機構がととのえられた。（ラタナコーシン歴121年（1902）サンガ統治法の公布）。

第3期 (1941～1962)

1932年6月のクーデタによって、タイは立憲君主制となったが、サンガの統治機構にも、民主主義の原則が導入されることになった。（仏歴2484年（1941）サンガ法）。

第4期（1962～）

国民的統合の強化のため、積極的に仏教シンボルを操作しようとしたサリット政府は、民主制原理の導入の結果、まひ状態にあったサンガの統治機構を、極度に単純化し、サンガの首長の罷免を合法化することによって、直接的干渉の効率化をはかった。この結局、サンガの国家への従属度は、いまだかってないほどに強化され、サンガの自律性は名目化した。（仏歴2505年（1962）サンガ法）。

○
ベトナム諸王朝の華僑政策

藤原利一郎

1. 初期王朝（丁～陳）の華僑政策。この時代のベトナム支配層を構成する人たちには華僑系（華僑又はその子孫）の者が多かったようである。当時は国家経営上華僑を大いに利用する必要があり、中国人の入国を歓迎し、永住華僑は官職にもつけ優遇した。併し、相次ぐ中国（宋・元）の侵寇から中国への警戒のため一時在住の華僑については、その居住地を制限し、入都を禁じたりもした。
2. 黎朝前期（莫登庸の篡奪まで）の華僑政策。明（永楽帝）の大征略をうけた後でもあり、中国及び中国人に対する警戒が厳重を極め、当時は開港地以外での新来華僑の活動は殆んどみられなかつたようである。
3. 黎朝後期（主に鄭阮対立時代）の華僑政策。17世紀半ば以後、明清鼎革後の乱を避け本国に来住の華僑は俄かに増加した。当時ベトナムの北半を領した鄭氏は華僑の本国人との新居や入都を禁じ、また風俗・言語を本国風に改めさせるなど種々の手段を用いて華僑に圧迫を加えた。最大の理由は前代同様中国に対する警戒に由来するといえるが、尙当時における華僑の急増が民風を害し、治安を悪化させたことも関係があろう。一方南部に拠った阮氏の華僑政策は寛大で、一時在住の華商にも特典を与えた。とくに永住の華僑については明香社などの籍に入れ、税役その他の面で本国人よりも優遇した。これは領内人口が寡少のため、南疆開拓に伴う国土開発に華僑を利用する必要があったためである。なお阮氏の所領は直接中国と接壤していないため華僑への警戒はさほど厳する必要はなかったものと思われる。かくて阮氏治下では華僑はとくに大きな発展をとげ、華僑

1932年6月のクーデタによって、タイは立憲君主制となったが、サンガの統治機構にも、民主主義の原則が導入されることになった。（仏歴2484年（1941）サンガ法）。

第4期（1962～）

国民的統合の強化のため、積極的に仏教シンボルを操作しようとしたサリット政府は、民主制原理の導入の結果、まひ状態にあったサンガの統治機構を、極度に単純化し、サンガの首長の罷免を合法化することによって、直接的干渉の効率化をはかった。この結局、サンガの国家への従属度は、いまだかってないほどに強化され、サンガの自律性は名目化した。（仏歴2505年（1962）サンガ法）。

○
ベトナム諸王朝の華僑政策

藤原利一郎

1. 初期王朝（丁～陳）の華僑政策。この時代のベトナム支配層を構成する人たちには華僑系（華僑又はその子孫）の者が多かったようである。当時は国家経営上華僑を大いに利用する必要があり、中国人の入国を歓迎し、永住華僑は官職にもつけ優遇した。併し、相次ぐ中国（宋・元）の侵寇から中国への警戒のため一時在住の華僑については、その居住地を制限し、入都を禁じたりもした。
2. 黎朝前期（莫登庸の篡奪まで）の華僑政策。明（永楽帝）の大征略をうけた後でもあり、中国及び中国人に対する警戒が厳重を極め、当時は開港地以外での新来華僑の活動は殆んどみられなかつたようである。
3. 黎朝後期（主に鄭阮対立時代）の華僑政策。17世紀半ば以後、明清鼎革後の乱を避け本国に来住の華僑は俄かに増加した。当時ベトナムの北半を領した鄭氏は華僑の本国人との新居や入都を禁じ、また風俗・言語を本国風に改めさせるなど種々の手段を用いて華僑に圧迫を加えた。最大の理由は前代同様中国に対する警戒に由来するといえるが、尙当時における華僑の急増が民風を害し、治安を悪化させたことも関係があろう。一方南部に拠った阮氏の華僑政策は寛大で、一時在住の華商にも特典を与えた。とくに永住の華僑については明香社などの籍に入れ、税役その他の面で本国人よりも優遇した。これは領内人口が寡少のため、南疆開拓に伴う国土開発に華僑を利用する必要があったためである。なお阮氏の所領は直接中国と接壤していないため華僑への警戒はさほど厳する必要はなかったものと思われる。かくて阮氏治下では華僑はとくに大きな発展をとげ、華僑

都市や華僑の大資産家も生まれた。

4. 西山朝の華僑政策。西山の乱の初期には華僑の一隊が西山側につき活躍したが、和義道華僑の一部が阮氏の軍を助けたことからショロンの華僑の大虐殺が行われた。西山朝の華僑政策は明かでないが、民族主義的傾向の強いこの王朝の性格からみて華僑に厳しい政策がとられたことが推察せられる。

5. 阮朝の華僑政策。阮朝は旧阮氏の華僑政策をうけついだ。ただ阮朝は旧阮氏と異なり、全ヴェトナムの統治者であり、その版図は中国と接するが、阮朝は中国（清）に恭順これつとめ、ひたすらその歓心を買い侵冠を避けようとした如くである。但し、中国への警戒は怠らず、屢々華僑を利用して中国の内情探索に当らせた。阮朝も明命以後華僑に対する扱いが厳しくなるが、これは華僑の急増に伴い、華僑の中に米・アヘン・金・銀の密輸など、不法行為をする者が続出したためである。また混血児增加に対処するため、明郷（香）社制を改め、新来華僑は華僑の耕籍に入れ、その子は成年に達するとともにすべて明郷社籍に入らせるようにした。

6. むすび。以上ヴェトナム歴朝の華僑政策を通観するに、中国と隣接するというこの国の特殊事情が大きくそれに影響していることが知られる。その華僑政策には中国への警戒の必要上、国情をもらしたり、内通する恐れがある華僑を抑圧すべしとする考え方と、華僑を利用して本国の発展に貢献させるため優待すべきであるとする考え方とともに反映されているようである。前者が最も強く作用したのが黎明・鄭氏の華僑政策であり、後者が最も強く作用したのが阮氏、阮朝の華僑政策であったといえるであろう。

マラヤ北西部の中国人集落について

前田清茂

京都大学東南アジア研究センターの「マレーシア地域調査班」は、1964年7月から12月まで、マレーシア連邦、ケダードー州、アロールジャングス（Alor Janggus）——華僑集落——に定着して、周辺のマレー人村落の集約的調査研究を行なった。

同時に、この集落の基本的な調査資料を収集したが、マレー人に対する顧慮と、言語の面での障壁があって、調査は十分には行なわれなかった。そのため、翌年7月から8月にかけて、華僑を対象として調査を行なうことになったのである。

調査結果については、拙稿「マラヤ北西部における中国人集落の構造（上）」『東南アジア研究』

都市や華僑の大資産家も生まれた。

4. 西山朝の華僑政策。西山の乱の初期には華僑の一隊が西山側につき活躍したが、和義道華僑の一部が阮氏の軍を助けたことからショロンの華僑の大虐殺が行われた。西山朝の華僑政策は明かでないが、民族主義的傾向の強いこの王朝の性格からみて華僑に厳しい政策がとられたことが推察せられる。

5. 阮朝の華僑政策。阮朝は旧阮氏の華僑政策をうけついだ。ただ阮朝は旧阮氏と異なり、全ヴェトナムの統治者であり、その版図は中国と接するが、阮朝は中国（清）に恭順これつとめ、ひたすらその歓心を買い侵冠を避けようとした如くである。但し、中国への警戒は怠らず、屢々華僑を利用して中国の内情探索に当らせた。阮朝も明命以後華僑に対する扱いが厳しくなるが、これは華僑の急増に伴い、華僑の中に米・アヘン・金・銀の密輸など、不法行為をする者が続出したためである。また混血児增加に対処するため、明郷（香）社制を改め、新来華僑は華僑の耕籍に入れ、その子は成年に達するとともにすべて明郷社籍に入らせるようにした。

6. むすび。以上ヴェトナム歴朝の華僑政策を通観するに、中国と隣接するというこの国の特殊事情が大きくそれに影響していることが知られる。その華僑政策には中国への警戒の必要上、国情をもらしたり、内通する恐れがある華僑を抑圧すべしとする考え方と、華僑を利用して本国の発展に貢献させるため優待すべきであるとする考え方とともに反映されているようである。前者が最も強く作用したのが黎明・鄭氏の華僑政策であり、後者が最も強く作用したのが阮氏、阮朝の華僑政策であったといえるであろう。

マラヤ北西部の中国人集落について

前田清茂

京都大学東南アジア研究センターの「マレーシア地域調査班」は、1964年7月から12月まで、マレーシア連邦、ケダードー州、アロールジャングス（Alor Janggus）——華僑集落——に定着して、周辺のマレー人村落の集約的調査研究を行なった。

同時に、この集落の基本的な調査資料を収集したが、マレー人に対する顧慮と、言語の面での障壁があって、調査は十分には行なわれなかった。そのため、翌年7月から8月にかけて、華僑を対象として調査を行なうことになったのである。

調査結果については、拙稿「マラヤ北西部における中国人集落の構造（上）」『東南アジア研究』

第3巻第5号および「同(下)」第4巻第1号、京都：東南アジア研究センター、1966年、3月、6月ならびに "A Chinese Community in Malaya" Kyoto: 1967 にゆずり、その印象的なものを口頭報告する。

この華僑集落は、マラヤ稻作農村の中の商人的集落といえる。マレー人農民に日常必需品を販売する雑貨商「什貨店」に従事する者、マレー人農民のかり取った糲を収荷、精米、移出する精米所「米峠」に關係する者、その他小売業、露天商、行商などを行なう者がほとんどを占めるが、マレー人の好む装飾品、貯蓄の対象としての金製品を製造、売買する金舗「打金」を営む者もある。

住民は福建人——閩南——の安溪県、その中でも仙都村出身者が多い。この仙都村出身の林始三兄弟およびその親戚、姻戚が経済的にも社会的にも優位を占め、「地縁」としては、福建、安溪、「血縁」としては、林氏一族——九龍堂林氏——が主流をしめる集落である。

当初の来村者は、主として、シンガポール、ペナン、アロールスターなどを中継地として当地に来た。ここは、福建人のマラヤ進出の最先端に近い集落である。今後は、周辺地、後方地との婚姻・商業などの関連について調査、研究したい。

華 僑 社 会 の 発 展 と 変 質

河 部 利 夫

(1) 東南アジアの華僑社会の研究の視座はもはや異質の少数民族としての自己完結社会としての把握によるものではない。華僑社会が現地民社会と取結ぶ acculturation をへて、第3の社会形成への動向を注視すべきである。それ故、かつて G.W. Skinner が行なったタイ華僑（新客層）135名の実態調査（1952年）とは別に、華裔（僑生層）のルーク・ジーン層の折出を、閣僚（19名）、制憲議会議員（260名）について行なってみた（1966年）。その結果、約60パーセント華裔が政治エリート層に存在することを知った。

(2) 東南アジア華僑研究は、上のような僑生層（タイ=ルーク・ジーン層、インドネシア=ブランカン層、マレーシア=ババ層など）の実態把握とそこに凝縮する、現地社会の政治・経済・文化などへの参加の機能に注目しなければならない。しかし、華僑社会と現地民社会との acculturation の類型は研究者の評価によって多種多様である。従来の伝統的な華僑研究における華僑社会の不变論、伝統固執論は、華僑問題を余りにもレーシャリズム、ナショナリズムのレベルで考究しているところに由来する。しかし、東南アジア社会の内外の境位の変化のなかで、そうした不变論では考

第3巻第5号および「同(下)」第4巻第1号、京都：東南アジア研究センター、1966年、3月、6月ならびに "A Chinese Community in Malaya" Kyoto: 1967 にゆずり、その印象的なものを口頭報告する。

この華僑集落は、マラヤ稻作農村の中の商人的集落といえる。マレー人農民に日常必需品を販売する雑貨商「什貨店」に従事する者、マレー人農民のかり取った糲を収荷、精米、移出する精米所「米峠」に關係する者、その他小売業、露天商、行商などを行なう者がほとんどを占めるが、マレー人の好む装飾品、貯蓄の対象としての金製品を製造、売買する金舗「打金」を営む者もある。

住民は福建人——閩南——の安溪県、その中でも仙都村出身者が多い。この仙都村出身の林始三兄弟およびその親戚、姻戚が経済的にも社会的にも優位を占め、「地縁」としては、福建、安溪、「血縁」としては、林氏一族——九龍堂林氏——が主流をしめる集落である。

当初の来村者は、主として、シンガポール、ペナン、アロールスターなどを中継地として当地に来た。ここは、福建人のマラヤ進出の最先端に近い集落である。今後は、周辺地、後方地との婚姻・商業などの関連について調査、研究したい。

華 僑 社 会 の 発 展 と 変 質

河 部 利 夫

(1) 東南アジアの華僑社会の研究の視座はもはや異質の少数民族としての自己完結社会としての把握によるものではない。華僑社会が現地民社会と取結ぶ acculturation をへて、第3の社会形成への動向を注視すべきである。それ故、かつて G.W. Skinner が行なったタイ華僑（新客層）135名の実態調査（1952年）とは別に、華裔（僑生層）のルーク・ジーン層の折出を、閣僚（19名）、制憲議會議員（260名）について行なってみた（1966年）。その結果、約60パーセント華裔が政治エリート層に存在することを知った。

(2) 東南アジア華僑研究は、上のような僑生層（タイ=ルーク・ジーン層、インドネシア=ブランカン層、マレーシア=ババ層など）の実態把握とそこに凝縮する、現地社会の政治・経済・文化などへの参加の機能に注目しなければならない。しかし、華僑社会と現地民社会との acculturation の類型は研究者の評価によって多種多様である。従来の伝統的な華僑研究における華僑社会の不变論、伝統固執論は、華僑問題を余りにもレーシャリズム、ナショナリズムのレベルで考究しているところに由来する。しかし、東南アジア社会の内外の境位の変化のなかで、そうした不变論では考

えられないものが出来ることを見逃すことはできない。たとえ、華僑の不变的性格を強調しても、それは現実には各国のナショナリズムという実体のなかに位置づけて考察する方がより妥当ではなかろうか。

Patterns of Acculturation

Society	Key Words
Plural S.	Minority, Communalism, Racialism, Nationalism, Traditionalism, Aliens, Oriental - Foreigners, A separate Group Yellow Imperialism, A third China, 海外中華
Complex S.	Amalgamation, Dualism, Dual Society, A double Identity, A intermediate Society
Configu - ration S.	Assimilation, Absorption, Nativization, Regionalization, Thai - ification, Indonesianization. ----- Integration, A third party, A future Southeast Asian

要するに、華僑社会と現地民社会の acculturation における、政治的・経済的・社会的・文化的な national orientation の合致の度合の評価に、種々な評価が下されるものといえる。

(3) 華僑史と華僑論 最後に、華僑研究において、従来わが国で行なわれてきた、二つの形の研究態度について考究してみたい。要するに、華僑研究というものの歴史的時間の限定をどのように設定すべきか否かの問題である。紀元前以来の東南アジア諸民族のシナ化、あるいは南海経略、南洋貿易、朝貢などの歴史的過程における中国人の移住定着、シナ人町の形成などを華僑研究の枠ぐみを考えるにあたって、どのように処理したらよいのであろうか。「中国人にして海外に居住する者」という華僑の字義に依れば、時間的にも空間的に華僑研究は遠大にひろがっていく。

それを限定するには、華僑史の起点を共時的な問題意識のなかでうけとめることによって実現できないであろうか。例えば、華僑問題を民族社会・文化の contact すなわち、双務的な acculturation の過程としてとらえてみる。そこには、文化の伝達と受容の作用をとおしてある種の

culture change がある段階が提起される。Challenge のみでは、巨視的にいえばシナ化であり、朝貢である。Response を機能することによって、文化綜合 (a synthesis of cultures) が実現されたときが起点ともなろう。

あるいは、Furnivall のいうような植民地下における複合社会の形成という現地社会の構造変化を起点とすることも考えられる。その意味において、16, 7世紀のシナ人町のもった意味、それが当時の社会にどの程度に構造的インパクトを与えたかを精細に考察する必要があろう。近代のチャイナ・タウン（中華街）が閉鎖的に自己完結的に存在するのに意味があるのでなく、その流通機能が現地社会経済に及ぼしている影響こそ、研究の意義があることはいうまでもない。

◎ 華僑史研究の通的性を、問題意識の設定による共時的構造的考察感覚によって、上限をどこにおくかが問題である。ヨーロッパ帝国主義政策下にありこまれた、植民地東南アジアの華僑労働力の需要と南中国沿岸地域の対応原因との有機的連関のなかに、十九世紀以来の華僑人口の爆発的増大がある。この世紀の末ころより、「華僑」の二字のみは現れはじめたといわれるのも印象的であろう。

委 員 会 報 告

本年度第3回の委員会は6月9日に開かれ、特に河部利夫・藤原利一郎両氏の御出席を得て第6回研究大会のプログラム・研究発表者・シンポジウムの報告者とそのコメンティターについて協議した。

○ 第4回の委員会は6月27日に開かれ、学会誌の発行・会長選出の方法・会員増加の対策・第7回研究大会について協議した。特に会長選出の議題については山本達郎会長から会長の固定化を避けるため辞任したいとの強い御希望によるものであった。

第5回の委員会は7月14日に開かれ、特に生田滋氏・小川博氏・河部利夫氏の御出席を得て、会長候補者選考委員会委員の選挙方法・東南アジア史学会役員選出規則・学会誌の発行・第7回研究大会の日程・本会財源の確保等について協議し、決定した点は次の通りである。

1. 会長候補者選考委員会委員選挙に関する件

選挙管理委員

会長指名による生田滋・小川博・河部利夫の3氏と委員会から中塚発夫・量博満両氏を加えた5名。

選挙日程

昭和44年9月10日 登録〆切

(本日付で選挙人名簿 — 会員名簿兼用 — を作製)

9月20日 投票用紙発送

10月7日 投票〆切 (10月7日付消印有効)

10月11日 開 票

10月18日 会長候補選考委員会の第1回会合

11月4日 結果の最終的内定

11月10日 第7回大会の会員総会に上程・決定。

投票方法

直接無記名とし、4名を連記する。

(その他は下記の「東南アジア史学会役員選出規則 — 委員会案 —」を参照。)

「東南アジア史学会役員選出規則」

(委員会案)

第1条 1. 会長は会長候補者選考委員会の選考を経て、会員総会において決定する。

2. 会長候補者選考委員会委員の選出は本規則第3条の定めるところによる。

第2条 1. 会長を除く他の役員(本学会会則第6条第1項に定める委員)は会長の指名にもとづき、会員総会において決定する。

2. 本条第1項の役員は本部委員と地区委員により構成される。

第3条 会長候補者選考委員会委員(以下選考委員と呼ぶ)の選出は次の各項による。

1. 選考委員の選挙は選挙管理委員会の管理のもとに行なう。

選挙管理委員会は委員2名を含む5名をもって構成し、会長がこれを指名する。

2. 選考委員の定数は7名とする。

3. 選考委員の選挙は国内在住の会員の直接選挙によって行なう。

4. 選挙権及び被選挙権を有する者は会費を完納した会員とする。

5. 投票は所定の投票用紙による無記名投票とし、4名を連記するものとする。

2. 学会誌発行に関する件

学会誌名

仮称「東南アジア — 歴史と文化 —」

編集日程

現委員会により原稿を集め、秋に発足する新委員会・編集委員会が編集を担当する。

原稿〆切は昭和44年10月31日。

内容

論文 字数には特に制限を加えないが、2号にわたらないこと。

新史料・データ

翻訳を含む。

書評

3. 第7回研究大会に関する件

期日 昭和44年11月10日(月)

場所 東京・学士会館本郷分館

プログラム 海外からの外国人研究者の特別講演と会員の自由発表。

4. 本会財源の確保に関する件

終身会員・団体会員・寄附等について今後協議する。

研究会報告

下記の如く、研究会はお茶の水女子大学史学研究室と学士会館本郷分館において開かれた。

4月25日(金)

インドネシアにおける歴史研究の現状

永積昭氏

5月12日(月)

香港・沙田の蟹民について

河児弘明氏

5月23日(金)

カンボジアのアンコール古蹟に見られるアプサラス浮彫像の様式的展開

—碑銘学的建立年代の分っているアプサラス浮彫像—

伊東照司氏

6月9日(金)

華僑問題について

河部利夫氏

伊東照司氏の発表要旨

本論は主に1966年度 カンボジア現地野外調査で作成した自分の資料の一部を「建立年代の分

っている古跡建造物のアプサラス浮彫像」と題して、紹介及び中間発表したものである。それ故、本論は寧ろ野外調査の成果を述べた調査報告である。

内容は印度支那美術史研究の中核であるアンコール帝国（802年の Jayavarman II 世王即位より、シャム軍侵略による1432年のアンコール王都没落・疎開へと至る約600年間）が齎した多大なクメール古跡建造物（ヒンズー教・仏教）の身舎側壁に見られる女神像のアプサラス Apsaras（舞姫・天女）浮彫像（砂岩・化粧漆喰造り、像高約1m）の様式的展開研究である。このアプサラス浮彫像は、アンコール古跡建造物の大半に設されるもので、アンコール古跡建造物的一大特色をなし、言いかえるとクメール美術史上の「クラシック期」美術に於ける興味ある一課題である。そう言った点から、この研究課題の目的はまず、アンコール帝国時代に王都が置かれてあったアンコール地域（調査基地の Siem reap を中心とし、 Roluos 古跡群を含む地域）に散在する100近い古跡建造物の内、碑銘学的研究によって建立年代が判明されている古跡建造物^註（Prah Ko 879年・Bakong 881年・Lolei 893年・Phnom Bakheng 約900年・東 Mebon 952年・Pre Rup 961年・Banteay Srei 967年・Baphuon 約1060年・Angkor Vat 12世紀後半・Ta Prohm 1186年・Prah Khan 1191年・但し Ta Keo 約1000年はアプサラス浮彫像が彫られていないので省く）のアプサラス浮彫像を美術史で言う基準作例として設定する事、そしてその各時代の基準像容を基に、建立年代不明なる他の多くの古跡建造物のアプサラス浮彫像と比較して、その時代的位置を推測しようとするものである。

本論の発表はその基準作例となったアプサラス浮彫像を時代順に列挙し、その像容展開の流れを四つの様式に分類し、それを古い時代順に A 様式・B 様式・C 様式・D 様式と仮に名付けた。その A 様式は Hariharalaya 都内の Prah Ko・Bakong・Lolei のアプサラス浮彫像の像容で、B 様式は Phnom Bakheng の像がこの様式を代表し、C 様式は Banteay Srei・Baphuon に見られる像容で、D 様式はこの様式の起源を Angkor Vat に発していると考える像容で、Ta Prohm や Prah Khan に認められる。更にこの四つの様式の変遷を一般政治史と参照させて、その変遷は王都が遷都する度にアプサラス浮彫像の像容が変化もしくは一新していることを認めたのである。即ち A 様式と B 様式間には Yasovarman I 世王（889年～900年）による Hariharalaya 都から Yasodharapura 都への遷都があり、B 様式と C 様式間には一時的な Koh Ker の Chok Gargyar 都への遷都から再びアンコールへ復帰する往復の遷都と言う出来事が認められる。但し C 様式から D 様式への推移の理由は不明で、Baphuon から Ta Prohm へ至るまでの時間的間隙が 126 年も離れ過ぎており、今後の問題として残されている。

註. George Coedes : Pour Mieux Comprendre Angkor,
Paris, 1947. (英訳版, Angkor - an introduction-, London, 1963.)

地 区 別 調 査 活 動

[近畿地区]

京都地区における東南アジア研究活動の中心をなすものは京大東南アジア研究センターである。よってここではこのセンターの活動状況について専ら報告することとする。

I 現地調査研究

過去半年間におけるその主なものはタイ国チャオプラヤ・デルタ地域を対象とする自然科学的調査研究である。

1. 福井捷朗：チャオプラヤデルタの水稻の植物營養学的研究
2. 高谷好一，服部共生：中央デルタ地帯の地質学的研究
- 3.瀬戸口烈司：象を中心とする家畜研究
4. 渡部忠世，秋浜友也：中部遺跡 (Dvaravati Ayuthayaなど) 煉瓦中より発見の米の形態研究

その他

1. 佐藤孝：インドネシアにおける畑作物の農学的研究
2. 川口桂三郎，久馬一剛：フィリピン水田土壤学的研究

II セミナーの開催

ミシガン大学の魚類学者 John E. Bardach 教授を招いて2回にわたってセミナーを開催。

III 研究成果の出版・機関誌発行

1. Reports on Research in Southeast Asia Natural Science Series, No. 3
(Kiyoshi Takimoto; Geology and Mineral Resources in Thailand and Malaya,) # No. 4
(Keizaburo Kawaguchi & Kazutake Kyuma; Lowland Rice Soils in Thailand.) の刊行。
2. "東南アジア研究" 第6巻3号と4号 (岩村教授退官記念号) の発行。

IV 図書整備計画の進歩

タイ国近代史研究に不可欠の史料であるチュラロンコン王時代のシャム王国官報（1874—1908）のゼロックス化作業を完了し、1900年までの分が利用可能の状態になった。

V 留学生の派遣

研究者養成のためジョクジャカルタのガジャマダ大学とボゴール植物園へ、各1名の留学生を派遣、前者はインドネシア近代史を、後者は熱帯林学を研究している。

なお、天理大学ではインドネシア事情研究会が週1回、ハリソンの「東南アジア史」の輪読会をひらいている。

刊行物の中では特に次のものが注目される。

Atsushi Kobata—Mitsugu Matsuda :

Ryu Kyuan relations with Korea and South Sea

Countries. An Annotated translation of Documents in the Rekidai Hoan,

1969. 215 P. + 153 P. (plates)

全国大学院・大学別卒業論文一覧（昭和43年度）(II)

(順序五十音・敬称略)

大谷大学

安南社会経済史の一考察

岩田孝治

慶應義塾大学

ラッフルズのシンガポール建設

上野邦治

長江下流域の新石器時代について

岡本孝之

山海經に於ける樹林崇拜と太陽

小島曜子

南詔大理の仏教

桜井しおぶ

タイ政府に及ぼした西欧の影響

深沢俊子

全国大学院・大学別講義題目一覧（昭和44年度）(II)

(順序五十音・敬称略)

大阪外国语大学

タイ国憲政史

赤木孜

タイ文化史

石井米雄

南方仏教概論	佐々木 教悟
東南アジア史（大陸の部）	中 村 孝志
インドネシア文化史	中 村 孝志
ビルマ史概説	服 部 正一
京都大学	
インドネシア近世史の研究	中 村 孝志
京都女子大学	
大越国史の研究	藤 原 利一郎
慶應義塾大学	
(博士課程) 東洋史特殊研究 I 演習	
「G. Coedes : Les Etat Hindouises d' Indochine et d' Indonesie.」	竹 田 竜児
東洋史特殊研究 I	
「中世東西交通史資料の検討」	前 嶋 信次
東洋史特殊研究 II 演習	松 本 信広
(修士課程) 東洋史特殊講義 II 演習	
「古代中国庶民信仰史の研究」——山海經を中心として——	
	伊 藤 清 司
東洋史特殊講義 II	
「古代中国人の宗教と国家との関係」	松 本 信 広
(学 部) ベトナム語 II・III	
「ベトナム近代史資料」	川 本 邦 衛
東洋史演習 III	
「Donald F. Lach : Southcast Asia in the eye of Europa.」	
「Nguyen Khac Kham : An Introduction to Vietnamese Culture.」	
	竹 田 竜児
東洋外交史	
「ベトナム・ビルマに対する英人勢力の進出」	英 修道
言語学特殊	
「インドネシアの文化」	馬 淵 東一

[海 外 研 究 情 報]

シンガポールの東南アジア研究所

永 積 昭

アジア研究所は、1968年5月、シンガポール共和国政府の法令に基いて、独立の研究所として設立された。将来はこの研究所はシンガポール大学構内の新築の図書館内に移転する予定である。しかし、仮研究所とは言え、現在の建物も暖冷房が完備し、事務室や図書館はもとより、研究者のための個室もととのっている。

研究所は24人の評議員会により運営され、その評議員は、シンガポール大学、ナンヤン大学、政府任命委員、及び各種組織や団体の代表者から成る。そして10人の委員から成る実行委員会が日常の運営に当る。所長は職務上その議長を勤める。実行委員会は必要に応じて、フェローシップ及びスカラシップ選考委員会などの常任委員会を任命する。

この研究所は、東南アジアの近代化及び社会変革の諸問題に最大の関心を寄せている。従って時期としては、1800年頃以後の近代植民地時代、植民地消滅及び独立国家建設の時代に重きをおき、社会学、人類学、経済学、地理学、政治学など社会科学の諸分野における現在の諸問題の研究をめざしている。植民地行政の力学やその社会的影響、農村や都市の人口変動、人種問題、経済の近代化、社会、宗教、政治運動、都市化、工業化の社会的意義、農村開発の諸問題、あらゆるレベルでのエリート研究、社会階級とモビリティー、官僚制、言語問題、教育制度等々、研究領域は、将来多くの分野に及ぶことが想像される。

研究所は創設以来日が浅いので、まだ一定の研究計画を打ち出すには至っていない。従って各研究者が提出する計画は極めて重要であり、その中から上記の諸目的に最も関係深いものが選ばれるのである。同時に研究所は自分の研究スタッフを養成中である。将来見込ある者数名は現在海外の諸大学で訓練を受けている。やがてスタッフの人々は、研究所を主体とする長期計画のための、特定の研究方針を選ぶことになるかも知れない。なお研究所の方針として、シンガポールまたは外国の機関の委託研究は引き受けない。

研究所は、東南アジア研究のために必要な欧文の文献、及び東南アジア諸言語で書かれた雑誌、新聞、政府発行の公文書、等を急速に買い集めている。しかし現在の所、東南アジア資料についてはシンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン等からしか得られないであろう。財政、人員の余裕が出来次第東南アジア大陸部の各国語で書かれた資料も附加えねばならない。

さて、研究所の初代所長、イエール大学歴史学科教授 Harry J. Benda 氏は、1年間の任期を終

え、今年8月中旬にシンガポールを出発、イエール大学に帰任する。そのあとはオーストラリアのモナシュ大学の歴史学科教授である John D. Legge 氏が同じく1年間所長に就任することになっている。前任者と同様、彼も近代インドネシア史の専門家で、現在はスカルノ前大統領の時代の研究に専念している。

研究所最初の Senior Research Fellow はインドネシアのガジャ・マダ大学歴史学科主任教授 Sartono Kartodirdjo 氏で、今年3月シンガポールに到着、6ヶ月を過した後一旦帰国し、1970年に再度滞在の予定である。バンテンにおける19世紀末の農民叛乱について、すぐれた研究を発表した彼は、研究所において19-20世紀のジャワにおける社会・宗教運動の研究に従事する予定である。なお、今年6月以降、もとマレーシア外務省官吏で、現在マレーシア大学の歴史学科に勤務する Zainal Abidin b. Wahid 氏が、学位論文のための史料採訪の目的で、この研究所に18カ月間滞在の予定である。今後この様な研究者がこの研究所を訪れる機会はますます多くなるものと思われる。

研究のためのフェローシップを受ける資格は東南アジア地域出身の研究者に限られているが、それ以外の地域出身の学者も、自国の研究施設が不十分な場合は考慮されることもある。期間は1年を普通とするが、必要に応じて延長することが出来る。フェローシップの額は本国での収入に応じて計算され、別に家族手当、家賃等が加算される。もっと詳しい事情を知りたい方は The Executive Secretary, Cluny Road, Singapore, 10, Republic of Singapore に連絡されたい。

キャンベラのオーストラリア国立大学

における東南アジア研究の近況

湯山 明

Canberraに大学を設置すべく、オーストラリア政府が委員会を設けたのは、当市が連邦の首府となった1927年のことであるが、早くも1930年3月には文理法商学系の講義が開始された。最初に学籍を置いた学生の数は32名にすぎないが、Melbourne大学に付属した形で、Canberra University Collegeと名づけられた大学は発足した。

オーストラリアのアジアに対する関心は、第二次大戦後急速に高まってきたが、これを反映して、政府がこの College に東洋諸語の教授を認可したのが1951年、翌1952年に School of Oriental Languages が設立され、1953年に中国語、1955年に日本語の講義が始められた。その後、School

え、今年8月中旬にシンガポールを出発、イエール大学に帰任する。そのあとはオーストラリアのモナシュ大学の歴史学科教授である John D. Legge 氏が同じく1年間所長に就任することになっている。前任者と同様、彼も近代インドネシア史の専門家で、現在はスカルノ前大統領の時代の研究に専念している。

研究所最初の Senior Research Fellow はインドネシアのガジャ・マダ大学歴史学科主任教授 Sartono Kartodirdjo 氏で、今年3月シンガポールに到着、6ヶ月を過した後一旦帰国し、1970年に再度滞在の予定である。バンテンにおける19世紀末の農民叛乱について、すぐれた研究を発表した彼は、研究所において19-20世紀のジャワにおける社会・宗教運動の研究に従事する予定である。なお、今年6月以降、もとマレーシア外務省官吏で、現在マレーシア大学の歴史学科に勤務する Zainal Abidin b. Wahid 氏が、学位論文のための史料採訪の目的で、この研究所に18カ月間滞在の予定である。今後この様な研究者がこの研究所を訪れる機会はますます多くなるものと思われる。

研究のためのフェローシップを受ける資格は東南アジア地域出身の研究者に限られているが、それ以外の地域出身の学者も、自国の研究施設が不十分な場合は考慮されることもある。期間は1年を普通とするが、必要に応じて延長することが出来る。フェローシップの額は本国での収入に応じて計算され、別に家族手当、家賃等が加算される。もっと詳しい事情を知りたい方は The Executive Secretary, Cluny Road, Singapore, 10, Republic of Singapore に連絡されたい。

キャンベラのオーストラリア国立大学

における東南アジア研究の近況

湯山 明

Canberraに大学を設置すべく、オーストラリア政府が委員会を設けたのは、当市が連邦の首府となった1927年のことであるが、早くも1930年3月には文理法商学系の講義が開始された。最初に学籍を置いた学生の数は32名にすぎないが、Melbourne大学に付属した形で、Canberra University Collegeと名づけられた大学は発足した。

オーストラリアのアジアに対する関心は、第二次大戦後急速に高まってきたが、これを反映して、政府がこの College に東洋諸語の教授を認可したのが1951年、翌1952年に School of Oriental Languages が設立され、1953年に中国語、1955年に日本語の講義が始められた。その後、School

of Oriental Studies と改称され、1956年には、非常勤ではあるが、インドネシア語も開講された。1958年8月に、A. H. Johns 博士が Senior Lecturer として就任し、インドネシア語は正式に教授され始めた。

さて、1946年8月には、オーストラリア国立大学法案が連邦議会で可決成立し、Canberra に Australian National University (A. N. U.) は設置された。大学院教育および研究を中心として出発した A. N. U. は、Institute of Advanced Studies (IAS) として、学部教育および研究を中心として出発した Canberra University College は School of General Studies (SGS) として、両機関は合併し、唯一の国立大学として再出発した。この新しい A. N. U. の発足は 1960 年 9 月のことである。

A. N. U. の東洋学研究は、S. G. S. の一部門として出発・発展してきたが、Faculty of Arts に含まれていた School of Oriental Studies は、1962年に Faculty of Oriental Studies として独立し、アジアの言語文化の教育研究機関となった。

A. H. Johns 博士が、1963年7月、教授に昇任して、Department of Indonesian Languages and Literatures が講座として成立した。1954年にロンドン大学で Ph. D. の学位を得た彼は、①その後 Canberra に来る 1958 年までインドネシアにあって研究を続けた。インドネシアのイスラーム神秘主義に興味をもち、イスラーム化に役割を果した Sufism の原典を批判的に研究発表している。②このほかに、現代文学の諸作品も英訳公表している。③

Soebardi 博士は、かつて日本軍占領下の高等師範で教育を受けた経歴をもつ、インドネシア大学出身者（修士）で、Bandung の Padjadjaran 大学文学部の言語文学研究所長を経て、1961年2月以来 Senior Lecturer として教鞭をとっている。ジャワにおけるイスラーム神秘主義の研究をもって、1967年に A. N. U. から Ph. D. の学位を得た。④この大部の研究論文も、近い将来に出版元を得て公刊されるであろう。彼はインドネシア語の研究にもひじょうな興味をもち、⑤現在、外国人のための入門書の出版を準備中である。

Soewito-Santoso 氏も、インドネシア大学の修士で、1964年2月に Lecturer として就任、1965年7月以来 Senior Lecturer の職にある。彼の専門は古代ジャワ語文献であり、インド教と仏教の混淆をめぐってやかましく論じられてきた Tantular の Sutasoma を原典批判的に編んで、翻訳を付した論文を、A. N. U. に Ph. D. の学位を請求して提出した。古代ジャワ語の学生にではあるが、インド学の講座が設けられる前に、この大学でサンスクリットをはじめて講じたのは彼であろう。

1961年9月に Lecturer として来任、1963年7月に Senior Lecturer に昇格し、現代インドネシア文学を講じているのが、Karta Mihardja Achdiat 氏（1911～）で、戦後に Atheis 等の作品を発表して注目を浴びた現役の作家である。

Surjohudojo Supomo 氏は、1967年2月に Lecturer として就任した Gadjah Mada 大学の修士で、その興味はやはり古代ジャワ語文献にある。Tantular の仏教的作品といわれる Arjuna wijaya を扱かって、学位論文の作製に専念している。

このほかに、インドネシア人である J. Johns 夫人（Senior Tutor）と E.H. Soebardi 夫人（Tutor）の二人が、tutorial を担当している。来年度には、Lecturer/Senior Lecturer 一名が増員されるはずである。今年度第一学期（3～5月）には、Leiden 大学文学部最長老の C.C. Berg 教授（オーストロアジア言語学担当）が、客員教授として、この学科に籍を置いていた。

なお、1967年5月以来、ある匿名の寄付者によって財政面が支えられて、English-Malay 辞典の編纂が進められている。監修者 Johns 教授のもとに、三人のマレーシア人助手が仕事にあたっている。4～5万の見出し語をもって、外国人のマレー語学習およびマレー人の英語学習のために編まれているこの辞典の完成目標は、1970年末におかれている。

東洋学部の Department of Asian Civilisation (主任・A.L. Basham 教授) では、他の学科が言語文学の研究教授を中心とした中で、現在、東アジア、東南アジアおよび南アジアの文化史的研究および教授がなされている。

大陸東南アジア史を担当するのが H.H.E. Loofs 博士 [Dip. Or. Lang. (Paris), Ph.D. (Fribourg)] で、1961年5月に Lecturer として来任、1964年7月に Senior Lecturer に昇格している。東南アジアの新石器文明を専門にする考古学者であるが、⑥地域を広げ、時代を下げても強い関心を示している。ロンドン大学の W.Watson 教授によって始められたタイの考古学調査に参加し、⑦ 1968年初の三ヵ月は団長として発掘調査に赴いた。現在、発掘品の整理研究に専念している。

インドネシアを中心とする東南アジア史を講ずるのが、Sutjipto Wirjosuparto 博士である。彼は、Gadjah Mada 大学を卒業後、Indonesia 大学に進んで学位 (M.A., Ph.D.) を得、同大学のインドネシア考古学文化史担当の教授であったが、1967年4月に Senior Lecturer として A.N.U. に来任した。彼の博士論文は、古代ジャワ語文献 Gato-kaca-sraya の校訂、翻訳、注訳であったという。

インドネシア経済の研究グループのあることをつけ加えて、このきわめて簡略な報告を終りたい。

Research School of Pacific Studies (IAS) の Department of Economics では、1965年6月以来、Bulletin of Indonesian Economic Studies を年に三回(3, 6, 10月)発行し、主任教授の H.W.Arndt 博士をはじめ、D.H.Penny 博士 (Fellow) や Jusuf Panglaykim 博士 (Senior Research Fellow) 等が論文を発表している。東京のアジア経済研究所から、インドネシア経済の専門家・米田公丸氏が Visiting Fellow として、この学科に籍を置いている。

- (1) A.H.Johns, "Malay Sufism, as illustrated in an anonymous collection of seventeenth century tracts", JRASMB, XXX, 2 (1957). [Ph.D. thesis]
- (2) 最近の著作一点: A.H.Johns, The Gift addressed to the Spirit of the Prophet (= Oriental Monograph Series, I) (Canberra: A.N.U. Press, 1965), 224 pp.
- (3) 最新刊のものに: A.H.Johns (tr.), A Road with No End (London: Hutchinson, 1968), 150 pp. [原著: Mochtar Lubis, Djalan tak ada Udjung (Djakarta, 1951).]
- (4) Soebardi, The Book of Cabolek: A critical edition with introduction, translation and notes. A contribution to the study of the Javanese mystical tradition [Ph.D. thesis, 1967].
- (5) 最近発表の一点: Soebardi, "Malaysia and Indonesia: Closer Ties through History and Language", Persaudaraan (Melbourne University Indonesian Studies Society), I, 1 (1968), pp. 3-14.
- (6) 最近の著書一点: H.H.E. Loofs, Elements of the Megalithic Complex in Southeast Asia: An annotated bibliography (= Oriental Monograph Series, III) (A.N.U. Press, 1967), XX + 124 pp., 1 map.
- (7) H.H.E. Loofs and W. Watson, "The Thai-British Archaeological Expedition: A preliminary report on the work of the first season, 1965-1966", J. Siam Soc., LV, 2 (1967), pp. 237-272.

[国 内 研 究 情 報]

日本民族学会第8回研究大会報告

近 森 正

日本民族学会第8回研究大会は5月10日(土), 11日(日)の二日間にわたって神奈川県平塚市、の東海大学湘南校舎において開催された。東南アジア関係の研究発表は下記の如くである。

マラヤ東海岸のマレー人漁村の調査報告 マレー漁民と民具 河岡 武春

集魚技術にみられるウジャンと呼ぶ古い漁法、古くから中国およびインドの影響を大きく受けた民具などについての紹介。

ミナンカバウ社会の慣習法と家屋

倉田 勇

西スマトラのミナンカバウ母系社会の伝統的な慣習家屋にみられる生活様式の変化・慣習法家屋の社会的意味などについて。

華南山地の畲族 — 中国方志にあらわれた —

千葉 德爾

華南山地に住む畲族について漢民族の異民族同化過程。畲族が必ずしも純粹な畲族ではないことなどを考察。

南シナ少数民族の政治社会組織について

加治 明

中国南部の各地に居住するロロ、タイ、ヤオなど諸種族の政治社会組織について構造上の差異を指摘。

なお、シンポジウムでは、住居—民族学における物質文化の諸問題—がとりあげられ、東南アジアの資料も含めて、民族学における物質文化要素のひとつとしての住居が他の文化様相の中でどのような有機的関連をもっているかなどが討議された。

新刊書紹介

D. G. E. Hall: A History of South-East Asia.

Third Ed., 1968, 1019 pp., Macmillan 401-

内田晶子

この第三版はペーパーバックで、第二版に比べるとおよそ60頁ほど多いが、それは主としてThe economy of South-East Asia before the beginning of the European impact(第11章)、及び17、18世紀のカンボディアを扱ったThe rape of Cambodia(第24章)の2章が新たに加えられたことによるものである。7頁ほどの序文では、1955年以来の業績が要領よく

[国 内 研 究 情 報]

日本民族学会第8回研究大会報告

近 森 正

日本民族学会第8回研究大会は5月10日(土), 11日(日)の二日間にわたって神奈川県平塚市、の東海大学湘南校舎において開催された。東南アジア関係の研究発表は下記の如くである。

マラヤ東海岸のマレー人漁村の調査報告 マレー漁民と民具 河岡 武春

集魚技術にみられるウジャンと呼ぶ古い漁法、古くから中国およびインドの影響を大きく受けた民具などについての紹介。



ミナンカバウ社会の慣習法と家屋

倉田 勇

西スマトラのミナンカバウ母系社会の伝統的な慣習家屋にみられる生活様式の変化・慣習法家屋の社会的意味などについて。

華南山地の畲族 — 中国方志にあらわれた —

千葉 德爾

華南山地に住む畲族について漢民族の異民族同化過程。畲族が必ずしも純粹な畲族ではないことなどを考察。

南シナ少数民族の政治社会組織について

加治 明

中国南部の各地に居住するロロ、タイ、ヤオなど諸種族の政治社会組織について構造上の差異を指摘。

なお、シンポジウムでは、住居—民族学における物質文化の諸問題—がとりあげられ、東南アジアの資料も含めて、民族学における物質文化要素のひとつとしての住居が他の文化様相の中でどのような有機的関連をもっているかなどが討議された。



新刊書紹介

D. G. E. Hall: A History of South-East Asia.

Third Ed., 1968, 1019 pp., Macmillan 401-

内田晶子

この第三版はペーパーバックで、第二版に比べるとおよそ60頁ほど多いが、それは主としてThe economy of South-East Asia before the beginning of the European impact(第11章)、及び17、18世紀のカンボディアを扱ったThe rape of Cambodia(第24章)の2章が新たに加えられたことによるものである。7頁ほどの序文では、1955年以来の業績が要領よく

紹介されている。ビルマ研究における Gordon Luce らの業績、インドネシアでは de Casparis, Damais らの碑文研究、Stutterheim, Bosch, H. R. van Heeckeren らの考古学的研究、さらにメコンデルタの考古学的研究では Malleret, アンコールについては B. P. Groslier などの研究があり、特に 15 世紀以前の東南アジア史研究において、考古学と碑文学とが社会経済史研究に重要な材料を提供したことが指摘されている。この第三版の改訂箇所は、私の気づいた限りでおよそ 30 カ所ほどになるが、その大部分は第一部の 16 世紀初頭までの叙述に集中し、ことにマジャパヒトについては Zoetmulder, Pigeaud らの業績が加えられているほか、第一部全体にわたって Wolters, Wheatley, Wang Gang-wu らの漢文史料を駆使した研究成果が十分にとりあげられて いるのは注目すべきであろう。新しく加えられた第 11 章は、ヨーロッパの影響を受ける前の東南アジアの経済について、農耕（灌漑水稻耕作がインドシナ半島の人口分布や社会発展のカギとなっ たことを述べた G. Luce の研究を特に紹介）。土地所有形態（ことにジャワ）。生産物、村落、流 通、主要港と海路、外国貿易（君主の貿易支配や“シャバンダール”的存在）、などについて触れ ている。現在の研究段階では当然なのであろうけれども、あまりに簡単な叙述で少々失望した。将 来補筆さるべき箇所であろう。なお巻末の Bibliography は 1955 年以来の研究が加えられただけ でなく、それ以前の研究も第二版に比べると総体的に補われて充実している。

近著欧文書・論文一覧 (1968.1.-1969.7.)

AK (アジア経済研究所)・KT (国会図書館)・

TB (東洋文庫)

(1) 東南アジア一般

Commonwealth Consultative Committee on South and South-East Asia: The Colombo plan for co-operative economic development in South and South-East Asia.

1968. (KT)

Gt. Brit. Central Office of Information: Reference pamphlet, no. 75; South and South-East Asia. London, 1968, 36 p. (KT)

Harvard University: Southern Asia; Afghanistan, Bhutan, Burma, Cambodia, Ceylon, India, Laos, Malay, Nepal, Pakistan, Sikkim, Singapore, Thailand, Vietnam; classification schedule, classified listing by call number, alphabetical listing by author or title, chronological listing. Cambridge, 1968,

543 p. (KT)

Pelzer, K. J. : Man's Role in Changing the Landscape of Southeast Asia. The Journal of Asian Studies (=JAS), 27, 2, 1968, p. 269-280.

Rosario, G. del : A Modernization Standardization Plan for the Austronesian Derived National Languages of Southeast Asia. Asian Studies (=AS), Quezon, 6, 1, 1968, p. 1-18. (KT)

Shapiro, W. ; Asymmetric Marriage in Australia and Southeast Asia. Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde (=Bijdr.), 's-Gravenhage, 125, 1, 1969, p. 71-79. (KT)

Singaravelu, S. ; A Comparative Study of the Sanskrit, Tamil, Thai and Malay Versions of the Story of Rama with Special Reference to the Process of Acculturation in the Southeast Asian Versions. The Journal of the Siam Society (=JSS), Bangkok, 56, 2, 1968, p. 137-186. (TB)

Tugby, D. J. : Ethnological and allied work on Southeast Asia, 1950-66. Current Anthropology (=CA), Chicago, 9, 2/3, 1968, p. 185-206. (TB)

Tugby, E. : The distribution of ethnological and allied fieldwork in Southeast Asia, 1950-66. CA, 9, 2/3, 1968, p. 207-213. (TB)

Van der Kroef, J. M. : Kingship and Political Legitimacy in Southeast Asia: Patterns of an Enduring Tradition. Asiatische Bern, 22, 1968, p. 68-87 (TB)

(2) ピルマ

Ikin, E. W. et al : The blood groups and haemoglobins of the Burmese. Man, London, 4, 1, 1969, p. 118-122. (TB)

Roucek, J. S. : Burma in Geopolitics. Revue du sud-est asiatique et de l'Extrême Orient (=RS), Bruxelles, 1, 1968, p. 47-82. (AK)

Severino, R. : The Pressures on Burma's Foreign Policy: A Case Study. Philippine Studies (=PS), Manila, 16, 3, 1968, p. 460-486. (TB)

(3) カンボディア

Bénisti, M. : Recherches sur le Premier art Khmer: I. les linteaux dits de Thala Borivat. Arts Asiatiques (Ar. A), Paris, 18, 1968, p. 85-101. (TB)

Boeles, : The Buddhist Tutelary Couple Hariti and Pancika, Protectors of from a Relief at the Khmer Sanctuary in Pimai. JSS, 56, 2, 1968, p. (TB)

Boisselier, J. : Les Linteaux Khmers du VIII^e siècle Nouvelles données sur le style de Kompong Erak. Artibus Asiae, 30, 2/3, 1968, p. 101-144. (TB)

Boulbet, J. : Des femmes Bu Dih a quelques apsaras originales d'Angkor Vat. Ar. A, 17, 1968, p. 209-218. (TB)

Chhieng, A. : Etudes de philologie indo-khmère (V). Journal Asiatique (JA), Paris, 256, 2, 1968, p. 185-202. (AK)

Dagens, B. : Etude iconographique de quelques fondations de l'époque de Suryavarman Ier. Ar. A, 17, 1968, p. 173-208. (TB)

De Mestier du Bourg, H. : Le proces dans l'ancien droit khmer, d'après l'épigraphie. JA, 256, 1, 1968, p. 37-53. (AK)

De Mestier du Bourg, H. : ((Anray)), une circonscription religieuse de l'ancien Cambodge ? JA, 256, 2, 1968, p. 203-210. (AK)

Dolezal, I. : The Policy of Neutrality and the International Position of Cambodia. Asian and African Studies (=AAS), Bratislava, 4, 1968, p. 57-79. (TB)

Franz, von H. G. : Die Kunst der Khmer. Orientalistische Literaturzeitung, Berlin, 63, 9/10, 1968, S. 437-443. (KT)

Lewitz, S. : Recherches sur le vocabulaire cambodgien (IV). JA, 256, 2, 1968, p. 211-218. (AK)

(4) インドネシア

Bonheur, A. 1e: Quelques images des bas-reliefs ensevelis du Barabudur (Java Central, VIII^e-IX^e s.). Ar. A, 18, 1968, p. 119-168. (TB)

- Chabot, H. Th.: Processes of Change in Siau, 1890-1950. *Bijdr.*, 125, 1, 1969, p. 94-102. (KT)
- Colless, B. E.: Giovanni de' Marignolli: An Italian Prelate at the Court of the Southeast Asian Queen of Sheba. *Journal of Southeast Asian History* (=JSAH), Singapore, 9, 2, 1968, p. 325-341. (TB)
- Conklin, H. C.: Ifugao bibliography. Yale University, c. 1968, 75p. (KT)
- Dahm, B.: Nur der Ochs ist konsequent? Na schrift van Dr. Sluimers. *Bijdr.*, 124, 2, 1968, p. 273-276. (KT)
- De Vries, E.: The Agro-Economic Survey of Indonesia. *Bulletin of Indonesian Economic Studies* (=BIES), Canberra, 5, 1, 1969, p. 73-77. (AK)
- Djojodigeno, M.: Asas-asas hukum adat. Jogjakarta, 1958, 63p. (AK)
- Djojodigeno, M.: Bloedverwantschap en Clangemeenschap onder de Minangkabauers. *Bijdr.*, 124, 2, 1968, p. 262-272. (KT)
- Drewes, G. W. J.: Javanese Poems dealing with or attributed to the Saint of Bonan. *Bijdr.*, 124, 2, 1968, p. 209-240. (KT)
- Krisnandhi: The Economic Development of Indonesia's Sea Fishing Industry. *BIES*, 5, 1, 1969, p. 49-72. (AK)
- Lombard, D.: Histoires courtes d'Indonésie. Soixante-huit ((Tjerpen)) (1933-1965). Paris, 1968, 635p. (TB)
- Mc Nicoll, G.: Net Migration between Java and the Outer Islands. *BIES*, 5, 1, 1969, p. 78-80. (AK)
- Nagazumi, A.: Toward an Autonomous History of Indonesia — With Special Reference to the Dutch Historical Writings on Indonesia —. The Developing Economies. (=DE), Tokyo, 6, 2, 1968, p. 207-220. (TB)
- Needham, R.: Endeh: Terminology, Alliance and Analysis. *Bijdr.*, 124, 3, 1968, p. 305-335. (KT)
- Pasaribu, A. and Sitorus, B.: An Economic Survey of North Sumatra. *BIES*, 5, 1, 1969, p. 34-48. (AK)
- Peacock, J. L.: Rites of modernization; symbolic and social aspects of In-

- donesian proletarian drama. Chicago, 1968, 306 p. (AK)
- Peacock, J. L.: Ritual, Entertainment, and Modernization: A Javanese Case. Comparative Studies in Society and History, The Hague/Paris, 10, 3, 1968, p. 328-334. (TB)
- Penny, D. H. and Thalib, D.: Survey of Recent Developments. BIES, 5, 1, 1969, p. 1-33. (AK)
- Resink, G. J.: Indonesia's history between the myths; essays in legal history and historical theory. The Hague, 1968, 457 p. (KT)
- Sarkar, H. B.: The Migration of Sanskrit Grammar Lexicography, Prosody and Rhetoric to Indonesia. Journal of the Asiatic Society (JAS), Calcutta, 8, 2, 1966 (1968), p. 81-100. (TB)
- Sie Kwat Soen: Prospects for agricultural development in Indonesia, with special reference to Java. Wageningen, 1968, 185 p. (AK)
- Stuimers, L.: "Nieuwe Orde" op Java. Bijdr., 124, 3, 1968, p. 336-367. (KT)
- Soekmono, R.: Il faut sauver Borobudur. Ar. A, 18, 1968, p. 109-117. (TB)
- The Siauw Giap: The Samin and Samat Mouvements in Java: Two Examples of Peasant Resistance. RS, 1, 1968, p. 107-114. (AK)
- Ukun Surjaman: The Problem of Personal Pronouns in Bahasa Indonesia and the Presentation of the Words: nia, dia, and is. AS, 6, 1, 1968, p. 90-98. (KT)
- U.S. Foreign Service Institute: Indonesian newspaper reader, by Joseph M. Harter and others. Washington, 1968, 271 p. (KT)
- Van der Veur, P. W.: The Eurasians of Indonesia: A Problem and Challenge in Colonial History. JSAH, 9, 2, 1968, p. 191-207. (TB)
- Voorhoeve, P.: Additional Indonesian Manuscripts in the Chester Beatty Library. Bijdr., 124, 3, 1968, p. 368-385. (KT)
- Vreede, C.-de Stuers: Een nationale heldin: R. A. Kartini. Bijdr., 123,

3, 1968, p. 386-393. (KT)

Appell, G. N.: Social Anthropological Census for Cognatic Societies and its Application among the Rungus of Northern Borneo. *Bijdr.*, 125, 1, 1969, p. 80-93. (KT)

(5) マレーシア

Alatas, S. H.: Feudalism in Malaysian Society: A Study in Historical Continuity. *Civilisations (=C)*, Bruxelles, 18, 4, 1968, p. 579-592. (AK)

Allen, J. de V.: The Kelantan Rising of 1915: Some Thoughts on the Concept of Resistance in British Malayan History. *JSAH*, 9, 2, 1968, p. 241-257. (TB)

Altmann, G.: Some Phonic Features of Malay Shaer. *AAS*, 4, 1968, p. 9-16. (TB)

Benjamin, G.: Temiar Personal Names. *Bijdr.*, 124, 1, 1968, p. 99-134. (KT)

Che Asmah Haji Omar: Interplay of Structural and Socio-Cultural Factors in the Development of the Malay Languages. *AS*, 6, 1, 1968, p. 19-25. (KT)

Dentan, R. K.: Semai Response to Mental Aberration. *Bijdr.*, 124, 1, 1968, p. 135-158. (KT)

Evans, I. H. N.: The negritos of Malaya. London, 1968, 323 p. (KT)

Ismail Hussein: The Study of Traditional Malay Literature. *AS*, 6, 1, 1968, p. 66-89. (KT)

Jackson, J. C.: Planters and speculators; Chinese and European agricultural enterprise in Malaya, 1786-1921. Kuala Lumpur, 1968, 312 p. (KT)

Jones, A.: Orang Asli: An Outline of Their Progress in Modern Malaya. *JSAH*, 9, 2, 1968, p. 286-305. (TB)

Lau Teik Soon: Malaysia-Singapore Relations: Crisis of Adjustment, 1965-1968. *JSAH*, 10, 1, 1969, p. 155-176. (TB)

Milne, R. S.: Political Modernisation in Malaysia. *Journal of Commonwealth Political Studies*, London, 7, 1, 1969, p. 3-20. (AK)

Minattur, J. : Dravidian Elements in Malay Culture. RS, 1, 1968, p. 99-106.

(AK)

Sarkar, H. B. : Some Aspects of the Indianization of Ancient Malaya and the Role of the Brahmanas in it. JAS, 8, 1, 1966 (1968), p. 1-18. (TB)

(6) フィリピン

Aspilleria, P. S. : Basic Tagalog for foreigners and non-Tagalogs. Rutland, 1969, 235p. (KT)

Bateson, M. C. : Insight in a Bicultural Context. PS, 16, 4, 1968, p. 605-621. (TB)

Beadles, J. A. : The Debate in the United States Concerning Philippine Independence, 1912-1916. PS, 16, 3, 1968, p. 421-441. (TB)

Bernad, M. A. : Father Ducas and the Muslim Wars: 1752-1759. PS, 16, 4, 1968, p. 690-728. (TB)

Bernad, M. A. : The Hand of the Enemy: the Stories of Kerima Polotan. PS, 17, 1, 1969, p. 40-59. (TB)

Calleja-Reyes, J. : Ibalon: An Ancient Bicol Epic. PS, 16, 2, 1968, p. 318-347. (TB)

Casper, L. : Desire and Doom in Kerima Polotan. PS, 17, 1, 1969, p. 60-71. (TB)

Casper, L. : Elitism: The Hazards of Being a Vernacular Writer. PS, 17, 2, 1969, p. 283-296. (TB)

Cushner, N. P. : British Consular Dispatches and the Philippine Independence Movement, 1872-1901. PS, 16, 3, 1968, p. 501-534. (TB)

Darcy, P. Bn. : Aspects of Philippine Writing in English. PS, 17, 2, 1969, p. 249-265. (TB)

De Leon, F. P. : Poetry, Music and Social Consciousness. PS, 17, 2, 1969, p. 266-282. (TB)

Demetrio, F. : Toward a Classification of Bisayan Folk Beliefs and Customs. PS, 16, 4, 1968, p. 663-689. (TB)

- Demetrio, F. : Toward a Classification of Bisayan Folk Beliefs and Customs. PS, 17, 1, 1969, p. 3-39. (TB)
- Douglas, L. H. : Modernization in a transitional setting: a Philippines case study. C, 18, 2, 1968, p. 204-231. (AK)
- Francisco, J. R. : Further Notes on Pardo de Tavera's "El Sanscrito en la Lengua Tagalog". AS, 6, 2, 1968, p. 223-234. (KT)
- Frantzich, S. : Party Switching in the Philippine Context. PS, 16, 4, 1968, p. 750-768. (TB)
- Ikehata, S. : José Rizal: the Development of the National View of History and National Consciousness in the Philippines. DE, 6, 2, 1968, p. 176-192. (TB)
- Jocano, F. L. : Notes on Philippine Divinities. AS, 6, 2, 1968, p. 169-182. (KT)
- Lent, J. A. : Philippine Radio History and Problem. AS, 6, 1, 1968, p. 37-52. (KT)
- Lent, J. A. : Advertising in the Philippines. PS, 17, 1, 1969, p. 72-96. (TB)
- Llamzon, T. A. : On Tagalog as Dominant Language. PS, 16, 4, 1968, p. 729-749. (TB)
- Lumbera, B. L. : Tagalog Poetry during the Seventeenth Century. PS, 16, 1, 1968, p. 99-130. (TB)
- Lumbera, B. L. : Poetry of the Early Tagalogs. PS, 16, 2, 1968, p. 221-245. (TB)
- Lumbera, B. L. : Assimilation and Synthesis (1700-1800): Tagalog Poetry in the Eighteenth Century. PS, 16, 4, 1968, p. 622-662. (TB)
- Lumbera, B. L. : The "Urian" Lectures. PS, 17, 2, 1969, p. 193. (TB)
- Madigan, F. C. : Problems of Growth The Future Population of the Philippines. PS, 16, 1, 1968, p. 3-31. (TB)
- Marsella, J. A. : Some Contributions of the Philippine Magazine to the Development of Philippine Culture. PS, 17, 2, 1969, p. 297-331. (TB)

- Mc Lachlin, B. and Blackburn, B.: Verbal Clauses of Sarangani Bilaan. AS, 6, 1, 1968, p. 108-128. (KT)
- Nimmo, H. A.: Reflections on Bajau History. PS, 16, 1, 1968, p. 32-59. (TB)
- Panganiban, J. V.: Concise English-Tagalog dictionary. Rutland, 1969, 170 p. (KT)
- Pearson, M. N.: The Spanish 'Impact' on the Philippines, 1565-1770. Journal of the Economic and Social History of the Orient (=JESHO), Leiden, 12, 2, 1969, p. 165-186. (KT, TB)
- Quirino, C.: Aftermath of the British Invasion of the Philippines. PS, 16, 3, 1968, p. 540-544. (TB)
- Schumacher, J. N.: The Depth of Christianization in Early Seventeenth-Century Philippines. PS, 16, 3, 1968, p. 535-539. (TB)
- Tagumpay-Castillo, G. and Hilomen-Guerrero, S.: The Filipino Woman: A Study in Multiple Roles. Journal of Asian and African Studies (=JAA), Leiden, 4, 1, 1969, p. 18-29. (AK, TB)
- Tan, A. L.: A Survey of Studies on Anti-Sinoism in the Philippines. AS, 6, 2, 1968, p. 198-207. (KT)
- Valdepenas, V. B.: The Economic Challenge in the Philippines. PS, 16, 2, 1968, p. 278-296. (TB)
- (7) シンガポール
- Chan Heng Chee: Singapore's Foreign Policy, 1965-1968. JSAH, 10, 1, 1969, p. 177-191. (TB)
- Chiang Hai Ding: The Early Shipping Conference System of Singapore, 1897-1911. JSAH, 10, 1, 1969, p. 50-68. (TB)
- Colless, B. E.: The Ancient History of Singapore. JSAH, 10, 1, 1969, p. 1-11. (TB)
- Mcintyre, W. D.: The Strategic Significance of Singapore 1917-1942: The Naval Base and the Commonwealth. JSAH, 10, 1, 1969, p. 69-94. (TB)
- Pang Cheng Lian: The People's Action Party. JSAH, 10, 1, 1969, p. 142-

154. (TB)

Png Poh-seng : The Straits Chinese in Singapore A Case of Local Identity and Socio-cultural Accommodation. JSAH, 10, 1, 1969, p. 95-114. (TB)

Saw Swee Hock: Population Trends in Singapore, 1819-1967. JSAH, 10, 1, 1969, p. 36-49. (TB)

Singapore. Ministry of Culture: Singapore; facts and figures. Singapore, 1968, 66 p. (KT)

Turnbull, C. M.: The European Mercantile Community in Singapore. JSAH, 10, 1, 1969, p. 12-35. (TB)

Yeo Kim Wah: A Study of Three Early Political Parties in Singapore. 1945-1955. JSAH, 10, 1, 1969, p. 115-141. (TB)

Yong Ching Fatt: A Preliminary Study of Chinese Leadership in Singapore, 1900-1941. JSAH, 9, 2, 1968, p. 258-285. (TB)

(8) 夕 1

Allison, G. H.: Easy Thai; an introduction to the Thai language. with exercises and answer key. Rutland, 1969, 105 p. (KT)

Bee, p. : The Analysis of Thai Tones: An Argument. JSS, 56, 2, 1968, p. 273-287. (TB)

Boeles, J. J.: The Buddhist Tutelary Couple Hariti and Pancika, Protectors of Children, from a Relief at the Khmer Sanctuary in Pimai. JSS, 56, 2, 1968, p. 187-206. (TB)

Boeles, J. J.: A Rāmāyana Relief from the Khmer Sanctuary at Pimai in North-East Thailand. JSS, 57, 1, 1969, p. 163-177. (TB)

Bradley, W. L.: The Accession of King Mongkut. JSS, 57, 1, 1969, p. 149-162. (TB)

Griswold, A. B. et al.: A Declaration of Independence and its Consequences ; Epigraphic and Historical Studies, No. 1. JSS, 56, 2, 1968, p. 207-250. (TB)

Griswold, A. B. et al.: The Asokarama Inscription of 1399 A. D. Epig-

- raphic and Historical Studies, No. 2. JSS, 57, 1, 1969, p. 29-56. (TB)
- Griswold, A. B. et al.: The Pact between Sukhodaya and Nan. Epigraphic and Historical Studies, No. 3. JSS, 57, 1, 1969, p. 57-107. (TB)
- Griswold, A. B. et al.: A Law Promulgated by the King of Ayudhya in 1397 A. D. Epigraphic and Historical Studies, No. 4. JSS, 57, 1, 1969, p. 109-148. (TB)
- Ling, T.: Buddhist Factors in Population Growth and Control. A Survey based on Thailand and Ceylon. Population Studies, London, 23, 1, 1969, p. 53-60. (AK)
- Moerman, M.: A Thai Village Headman as a Synaptic Leader. JAS, 28, 3, 1969, p. 585-550. (TB)
- Piker, S.: Sources of Stability and Instability in Rural Thai Society. JAS, 27, 4, 1968, p. 777-790. (TB)
- Singaravelu, S.: A Note on the Possible Relationship of King Rama Kham-haeng's Sukhodaya Script of Thailand to the Grantha Script of South India. JSS, 57, 1, 1969, p. 1-28. (TB)
- Udom Warotamasikkhadit: A Note on Internal Rhyme in Thai Poetry. JSS, 56, 2, 1968, p. 269-272. (TB)
- Wijeyew ardene, G.: Address, abuse and animal categories in Northern Thailand. Man, 3, 1, 1968, p. 76-93. (TB)
- Wyatt, D. K.: Family Politics in Nineteenth Century Thailand. JSAH, 9, 2, 1968, p. 208-228. (TB)
- Yano, T.: Sarit and Thailand's "Pro-American Policy". DE, 6, 3, 1968, p. 284-299. (TB)
- (9) ベトナム
- Duncan, G.: Vietnam and the Future of Southeast Asia II. Australian Outlook (A AO), Canberra, 23, 1, 1969, p. 33-45. (AK)
- Fairbairn, G.: Vietnam and the Future of Southeast Asia I. AO, 23, 1, 1969, p. 18-32. (AK)

- Falk, R. A. ed.: *The Vietnam War and international law*. Princeton, 1968.
633 p. (KT)
- Gerard, M.: La région de Camau vers 1898. *Bulletin de la Société des Etudes Indochinoises* (=BSEI), Saigon, 43, 3, 1968, p. 219-247. (KT, TB)
- Leckie, R.: *The wars of America*. New York, 1968, 1052 p. (KT)
- Maurand, P.: Politique forestière à envisager au Viet-Nam dans l'après-guerre. BSEI, 43, 4, 1968, p. 265-309. (KT, TB)
- Miller, J. D. B.: *Lessons from Vietnam*. AO, 23, 1, 1969, p. 68-80. (AK)
- Nguyen-Huy: Les Formations latéritiques à Binh-Duong. BSEI, 43, 1, 1968, p. 29-49. (KT, TB)
- Nguyen The-anh: Les publications de documents historiques dans la République du Vietnam depuis 1955. BSEI, 43, 1, 1968, p. 53-60. (KT, TB)
- O'Neill, R.: *Australian Military Problems in Vietnam*. AO, 23, 1, 1969, p. 46-57. (AK)
- Osborne, M. E.: Post Vietnam: The End of an Era in South-East Asia? *International Affairs*, London, 45, 2, 1969, p. 223-233. (AK)
- Pietrantoni, E.: Note sur les classes de revenus au Laos et au Tonkin avant 1945. BSEI, 43, 3, 1968, p. 181-194. (KT, TB)
- Rawson, D. W.: *The Vietnam War and the Australian Party System*. AO, 23, 1, 1969, p. 58-67. (AK)
- Ross, W.: *Bamboo terror; a thrilling tales of Vietnamese espionage*. Rutland, 1969, 260 p. (KT)
- Sampson, G.: Hanoi dorsal finals. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, London, 32, 1, 1969, p. 115-134. (KT, TB)
- Saurin, E.: Nouvelles observations préhistorique à l'Est de Saigon. BSEI, 43, 1, 1968, p. 1-17. (KT, TB)
- Tchetchkov, M. A.: La classe dirigeante du Vietnam précolonial. *La Pensée*, Paris, 144, 1969, p. 28-40. (AK)
- Watt, S. A. S.: *Vietnam; an Australian analysis*. Melbourne, 1968, 177 p. (KT)

お 知 ら せ

- 会長候補者選考委員会委員の投票の〆切は来る 10 月 7 日に決定しました。（委員会報告を参照）
- 学会誌「東南アジア——歴史と文化——」（仮称）の原稿を募集します。〆切は来る 10 月 31 日。（委員会報告を参照）
- 東南アジア史学会第 7 回大会は来る 11 月 10 日（月）に東京・学士会館本郷分館にて開催します。
- 東南アジア史学会に関する連絡は次の住所宛にお願いします。
東京都千代田区紀尾井町 7 上智大学白鳥研究室 気付 Tel (03) (265) 9211
- 本年 9 月以降の研究会の計画は後日郵送いたします。

編 集 後 記

前号に引き続き、東南アジアに関する全国の大学の卒論と講義題目等を掲載するように努力しましたが、極めて不充分なものになりましたことをお詫びします。学会誌発行の件は本学会結成の当初からの会員の希望でしたが、ようやくその仮称と発行の準備ができ上りました。会員の皆様の投稿を期待します。

また、東南アジア史に関心をお持ちの方々に入会していただくように、皆様の積極的な御支援をお願いします。

（仲田 浩三 記）